

ここはダルハソ？＝モンゴル日食記＝

大越 治

モンゴルの平原に輝くコロナ。なんとなく心ときめく言葉ではないか。今回の日食は太陽高度や継続時間から考えると、ロシアの方が条件がいい。にもかかわらずモンゴルを選んだのは、一度は訪れてみたい国だった（ロシアのあの地域は行ったことがある）からである。例によって公募ツアーではなく、家内や友人たちと12名の隊を組むことにした。

ロシアほどでなくても、早朝の日食では相当の低温が予想された。人間の方はどうとでもなるが、機材の保温は難しい。幸いP社の協力で大型冷凍庫内で機材テストを行うことができた。カメラやビデオは、湯たんぽ作戦で1時間以上は十分保つことが分かったが、赤道儀は15分でダウンした。急遽耐寒グリスへの入れ替えをする。確実に皆既を捉えたいので、魅力の薄い部分食は切り捨て、皆既をはさんで前後10分ずつを観測時間に考えた。

前日の同時刻にリハーサルを行うため、3月7日にダルハン入りした。とは言っても、朝に成田を発っての北京経由では、到着は深夜になってしまう。我々の宿舎になったのは、9階建てのマンションの6階。個人のお宅を借りたものだ。東向きのベランダがあり、ここから観測できるという恵まれた環境だ。到着してマイクロバスから降りると雪がちらほら。出迎えてくれた家主さんの話では、ここ数日は悪天候とのことだった。

寝ずに準備を始め、そのままリハーサルに突入だ。天候は少し回復して、夜明けのHB彗星のVサインも見ることができた。日の出は雲の中だったが、その後は無事にリハーサルを行う。気温は-17度。ますますである。

仮眠を取り、午後は市内に繰り出す。ダルハンホテルの周囲には、急ごしらえの観測者用ゲルが建ち並び、さらに増設が進んでいた。「誠**様」とか「天文***様」というのぼりや表札が、なんとなく異様である。「手洗い用」というゲルを見たときには思わず笑ってしまった。不謹慎なことだが、扉の前に観測者が列を作る様子を想像してしまったのである。我々の家主さんは「あれは人（寒さに慣れない外国人）が泊まるどころじゃない」と言っていたが、私はちょっと泊まってみたい気もした。

日食当日。暗いうちに目覚まして起きると、早くもベランダに出たメンバーが「-7度しかない」と言うのが聞こえた。この一言が全てを物語っている。今日はダメだと思った。

みんなのんびり朝食をとり、時々ベランダに出たりTVを見たりしている。とりあえず機材の準備はするが、その上にきれいな六角の雪の結晶が一つ、二つと舞い降りてくる。「今日は透明度がいいね（昨日は霧で隣の建物も見えなかった）」「暖かくて手袋もいらさないよ」などの声も聞こえるが、不思議に「く**てる」という言葉は誰からも聞こえない。無意識のうちに禁句にしているのだ。

そのうち日本の衛星放送で「日食中継」が始まった。画面では分厚い防寒具を着込んだT解

説委員がマイクを握り、そこに横殴りの雪が吹き付けている。「ここダルハンでは・・・」という悲痛な声。

思わず外を見るが、相変わらず六角の花はひらりひらりと落ちているだけ。誰ということもなくメンバーの間から「ここはひょっとしてダルハンではなく、ダルハンかもしれないぞ」という冗談も飛び出す。

第1接触の時刻を過ぎてても、天候は相変わらずだ。双眼鏡で見ると、遠く東の丘にはたくさん観測者が三脚を立てて待機しているのが見える。一方、我々の宿舎内では相変わらず飲んだり食べたりである。私がのんびりココアを飲んでいるのを見て、メンバーの一人は『大越さんがこの様子じゃ、今日は本当にダメかもしれない』と思ったそうだ。前述のように私は初めから20分しか観測しない予定だったのだから、余計な(正当な?)不安を与えてしまったようである。

しかし、外では雲が次第に薄くなり、なんとなくいけそうな案配になってきていた。雲のフィルターを通して、欠けた太陽が時折り姿を見せ始めた。いよいよ本気で準備開始だ。ほとんどのメンバーは屋上に機材を運び上げたが、私は予定通りベランダ観測だ。暖かいのでスリッパ履きのままである。

雲が多いので、私の観測項目の半分は取りやめ。ビデオだけを回してずっと双眼鏡で見続ける。今回は手ぶれ防止双眼鏡なので、抜群の快適さだ。

第二接触はダイヤモンドのみ。残念ながらリングにはならなかった。屋上から我々のメンバーの声が聞こえるが、それに加えて下の階のモンゴル人の叫び声も相当なものだ。黒い太陽は一時雲に没したがすぐに顔を出す。外部コロナは全く見えず、内部コロナも雲が横切るの形がはっきりつかめぬ。それでもストリーマーの一部やプロミネンスはきれいに見ることができた。まもなくコロナの右上が明るくなり、彩層に続いてダイヤモンドが出現。東側のベランダなので、やってくる本影錐はよくわからなかったが、去っていく方はなんとか見ることができた。しかし、予想していたより淡いものであった。日食天気階級表の表示で言えば1である。

日食に関してはそれだけである。今までの皆既の中では(曇られたフィンランドを除いて)最低の見え方である。間一髪で見えたスリルも忘れがたい、という意見もある。しかし、ディテールのないコロナはやはり印象に残らないのだ。また、機材操作をほとんどせず双眼鏡で見続けてみると、インドの倍以上の時間があっというまに過ぎていくのを感じた。私の場合、忙しくしていた方が時間を長く感じるようだ。

今回のモンゴル行の中で最も印象深かったのは、ダルハンに向かう途中で車を降りて見た夜空だ。今までに何回も降るような星空を見たことがある。しかし、星の輝きとはこういうものだったのか、と初めてわかった。手の届きそうな星空を初めて見た。それをもう一度見るためだけでも、モンゴルを再訪する価値があると今でも思っている。